語句
文法
内容理解

国語

1

次の文章を読み、あとの(1)〜(6)の問いに答えよ。

1 水というのは、おそろしい力をもっている。大雨が降って川の水かさが増せば、人間の力ではどうしようもないすさまじい勢いですべてのものを流しつくしてしまう。川の流れがかわれば、それによって人間の住居のありかたさえもがかわる。インダス河の河口の位置は、これまで何千年かのあいだに東にむかって移動し、かつて繁栄をほこったバンボール(注)の街はいま廃墟になってしまっている。とうてい人間は川の流れにはさからえない。人間は文字どおり、水の流れのままに生きているのである。

2 B 、いったん水の流れの性質を理解した人間は、その流れを使うことをくふうする。流れにのってものを運搬することも発明したし、水車をつくって流れを動力源にすることも考案した。流れをせきとめ、ダムをつくり水の流れおちるエネルギーを電気にかえることさえもやってのけた。水に使われる立場から水を使う立場へ――人間はそういう知的進化をとげたのだ。

3 情報についてもおなじことがいえる。情報の洪水のなかでわれわれはおぼれかけているかのようにもみえるのだが、視点をひっくりかえして、このおそるべき情報を使ってやろう、というふてぶてしい態度が生まれてもよいはずである。わたしが、この本で取材と名づけるのは、情報を使うことである。取材の立場とは、積極的、主体的に情報を使う立場のことである。

4 じっさい、その気になりさえすれば、使われる立場から使う立場への視点の転換はそれほどむずかしいことではない。 D 、使う立場に立ってみると、こんにちの情報爆発時代というのはまことにありがたい時代なのである。情報が多すぎて困る、というのも一面の真理だが、同時にこれだけたくさんの情報があるのだから、いったん使い方さえおぼえれば、どんな情報でも自由自在に手に入るのである。現代という時代は、あたかも情報の釣堀のごときもので、どんなアマチュアでも、ほんの手ほどき程度の釣りの技術をおぼえれば、たくさんの情報がおもしろいほど、どんどんかかってくるものなのだ。

5 情報のすくない時代には、当然のことながら情報はそうやすやすと手に入りはしなかった。本を読みたい、といっても本は貴重品だったから、よほどのことがなければ持ち主は他人に貸したりはしなかったし、だいたい、情報というものは洋の東西を問わず、ごく一部のエリートがひそかに独占していたものなのである。だから、情報を使うどころか、あつめることさえむずかしかった。だいたい、ふつうの人間が情報をあつめる、などというのはありえない話であった。だが現代はちがう。どんな情報でも、手に入る。そのためには金持ちである必要もなく、特別に高度の学歴が必要であるわけでもない。一人まえに読み書きができ、ごくあたりまえの常識さえもっていれば、誰でも自由な取材者になることができるのである。

6 わたしの知っているある若ものは、タダで手に入る情報だけで現代社会についての論文を書くことをかんがえた。かれは、街かどで配られるチラシ、ビラなどをもらい、商店ではカタログやマッチをもらい、そのぼう大な資料をとりまとめて、いまの日本の世相をさぐり、そして分析してみせてくれたのである。手に入れた資料はひとつのこらず、まったくタダ。

7 これなどは極端な例だけれど、その気になりさえすれば、情報はいくらでもあつまるのである。かんがえてみれば、こんなにたのしい時代はこれまでの人類史のなかで他に例をみない。社会にみちあふれるぼう大な情報量に悲鳴をあげるか、それとも勇躍としてこれを使いこなすか、それはひとことでいうなら、ひとりひとりの個人の決意の問題なのである。

（加藤秀俊「取材学」による）

(注)バンボール＝インダス河の河口付近に、十三世紀ごろまであった港町。

(1) 文章中の A ない と同じ品詞のものを、文章中の〜〜〜線部ア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

(2) 文章中の B ・ D に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア B＝だが　D＝そして　イ B＝また　D＝あるいは
ウ B＝したがって　D＝つまり　エ B＝しかも　D＝さらに

(3) 文章中に C 視点をひっくりかえして とあるが、「視点」をどうすることか。文章中のことばを用いて、**二十字以上、二十五字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(4) 文章中に E 誰でも自由な取材者になることができるのである とあるが、どのような意味か。最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　自分の態度を決めることさえできれば、情報の内容を理解するのはあまり難しくない。
イ　ごくふつうの常識があれば、金持ちでなくても多くの情報をすぐあつめることができる。
ウ　その気になりさえすれば、社会の中のどんな情報でも簡単に手に入れることができる。
エ　特別な技術や高度の学歴がなくても、積極的にたくさんの情報を使用することができる。

(5)　文章中に F ひとりひとりの個人の決意の問題なのである とあるが、どのような決意か。それが書かれている部分を、1～5段落の中から十六字で探し、はじめと終わりの二字を抜き出して書け。

(6)　この文章の構成について、次の各問いに答えよ。
①　この文章を前半と後半に分ける時、後半の部分はどこから始まるか。後半のはじめの段落番号を書け。
②　①のように分けられる理由として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。
ア　前提となる事実の説明が終わって筆者の主張が始まる部分であり、それ以前にはない新しい主題が提示されているから。
イ　予想される一般論について書かれたあとに、それを前提としながら、筆者の独自の意見が書き出されている部分だから。
ウ　序論が終わって本論が始まる部分であり、同じ主題について書かれてはいるものの、話題が大きく転換しているから。
エ　原因となる歴史的事実が語られたあとに、その結果現在起こっていることが本論として書き始められている部分だから。

語句　文法　内容理解　文脈把握

2

次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

近頃はレトロ・ブームとかで、私のようなものでもお座敷が多い。どうせブームだからすぐ過ぎ去ってしまうサと、別にそれによって左右されることはないが、いったいレトロとは何のことなのか、孫に訊いてみると一種の懐古趣味だという。そういえば先達ても何とかいう女性雑誌の記者が来て、昔の写真を貸してくれというから埃まみれのアルバムを持たせて帰したら、いろいろありがたそうなことを書いてくれた。まあ何かのたしになるのなら結構だが、私自身は自分の過去なんかにまったく興味はない。できれば抹殺したいほど恥多き人生で、……人生などという言葉を使うのは勿体ないほどA いたずらに年月をすごして来た。

〈ア〉
私の若い頃はやったアール・デコ(注1)なんて代物は悪趣味だし、夢二(注2)の絵なんか甘っちょろくて B 持ちならない。その上モボ・モガ(注3)、エロ・グロ・ナンセンス(注4)にまで近頃の若者はあこがれているらしい。原宿あたりのジャリ共は、何もわからないのだからそれでも許せるが、大のおとな達までが銀座の柳を恋い、昔の軽井沢はよかったなどと C の下を長くしているのをみると、戦争前夜と少しも変らぬではないかと不安になる。昔に還りたいならなぜ手近なところに範を求めず、D 一生かかってもいいから本物を見つけようとはしないのか。その方がずっとたのしみであり、やり甲斐もあると思うのだが。……

今、日本は大金持だそうである。そうであるというのは、まったく私とは関係のないことで、別の世界の出来事だと思っているからだ。先月のこの雑誌（「新潮45」）では現在の繁栄を、「ローマ帝国衰亡史」にたとえていたが、私たちもずい分偉くなったものである。瀬戸大橋ができたり、至るところで博覧会が催されたり、etc. であるのをみると、まんざら嘘でもなさそうだが、たとえ国を憂うるにしても、E いささか大仰ではあるまいか。ローマにたとえること自体が、失礼ながら私には、太りすぎた豚の思想のような気がしてならない。

〈イ〉
と、ここまで書いて来て書くことがなくなったので困っていると、京都の友達から電話がかかって来た。
「おかみはんが亡うならはりましたえ」
私たちの間で、「おかみさん」といえば一人しかいない。それは私たちが定宿にしていた京都の宿の主で、主というにはあまりにもそこはかとない女性であった。名前を佐々木達子といい、清水の静かな一角に住んでいた。その宿屋をはじめたのは彼女の叔母で、祇園の一流の芸妓であったが、近衛文麿(注5)、吉田茂(注6)、松永安左エ門(注7)、志賀直哉(注8)をはじめとする白樺派(注9)の人々、中でも里見弴(注10)は長年のひいきであった。戦後は小林秀雄(注11)、河上徹太郎(注12)、吉田健一(注13)など、特に小林さんは、「この宿屋は国宝だよ」といって愛していた。何も建築が立派だから国宝というのではない、おかみさんの立居振舞といい、心の遣いかたといい（ぬけ目のない気配りやサービスの意味ではない）、一点非の打ちどころのない人物だったからである。

〈ウ〉
その初代のおかみさんが、今から二十五年ほど前に亡くなった。姪の達子さんは、それまで台所で下働きをしており、私たちの前には殆んど顔を出さなかった。小柄な女性で、いくつになっても赤い帯をしめていたので、口の悪い人たちは「子守っ子」

と呼んでいた。その頼りない子守っ子が、「佐々木」の後を継ぐというので私たちは唖然とした。とてもやっては行かれまい、佐々木は一代で終りかとあきらめていたら、F驚くなかれおばさん以上に国宝的な存在となって今に至ったのである。

名妓であったおばさんには、多分にお嬢ちゃん的なわがままなところがあり、それが魅力でもあったが、長年下積みで苦労をした達子さんは我慢強かった。私たち一家はどんなに彼女のお世話になったかわからない。祖父、――つまりおばさんの父親が気難しい板前であったので、彼女は小さい時から料理が上手で、したがって味にはうるさかった。京都の料理屋は隅から隅まで知りつくし、料理ばかりでなく、それは日常の生活万端に及んでおり、これはと思う老舗では、「佐々木」といえばどこでも一目置かれていた。すべてそうしたことは先代のおばさんから受けつがれた訓練によるが、彼女はよくそれに応え、Gただささえうるさい客たちに至れりつくせりの接待をした。そういうものこそ私は、千年の歴史を誇る京都の「伝統」と呼びたいのだ。

〈エ〉

戦前からの二代にわたるおかみさんとの付合いが、突然切れたのだから私の落胆を想像して頂きたい。もっともこの二、三年は仕事が辛そうで、私は遠慮してなるべくホテルに泊るようにしていたが、京都へ行く度に見舞を欠かしたことはない。いつ行ってみても掃除は行き届いており、床の間には花が活けてあった。青々とした苔の庭も、そこに植えてあるどうだん[注14]も、萩も、つつじも、彼女の丹精のほどを示していた。客はいなくても、誇り高い彼女は、Hあたかもそこに客がいるかのように暮していたのである。

Iレトロやグルメで鵜の目鷹の目の女性雑誌も、「佐々木」のようなかくれた存在には目が届かなかった。が、それも今や昔語りとなった。清水の宿で、たのしい日々をすごした人々も、おおかた死んでしまった。おかみさんはそれが寂しくて、生きていられなかったに違いない。

さようなら、達子さん。

だがあなたが遺してくれたものは、私たちの孫子の末まで語りつぐでしょう。なつかしい日本として。かけがえのない憶い出として。Jささやかなところに神宿るというのはほんとうのことなのです。

（白洲正子「京の宿」による）

（注1）アール・デコ＝アール・デコラティフ（装飾美術）の略。一九一〇年代から三〇年代にフランスを中心に流行した美術工芸の様式。

（注2）夢二＝竹久夢二。画家・詩人（一八八四～一九三四）。

（注3）モボ・モガ＝モダンボーイ・モダンガールの略。大正末期から昭和初期にかけての流行語。

（注4）エロ・グロ・ナンセンス＝大正末期から昭和初期にかけて、エロチックなもの、グロテスクなもの、ナンセンスなものがはやった風俗傾向。

（注5）近衛文麿＝政治家（一八九一～一九四五）。

（注6）吉田茂＝政治家（一八七八～一九六七）。

（注7）松永安左エ門＝実業家（一八七五～一九七一）。

（注8）志賀直哉＝小説家（一八八三～一九七一）。

（注9）白樺派＝日本近代文学の一流派。雑誌「白樺」を中心にして活躍した作家、美術家などの総称。

（注10）里見弴＝小説家（一八八八～一九八三）。

（注11）小林秀雄＝文芸評論家（一九〇二～一九八三）。

（注12）河上徹太郎＝文芸評論家（一九〇二～一九八〇）。

（注13）吉田健一＝評論家・英文学者・小説家（一九一二～一九七七）。

（注14）どうだん＝ツツジ科の落葉低木。

(1) 文章中のAいたずらに、Eいささか、Gただささえ、Hあたかも のことばの意味の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　A＝むだに　E＝たぶん　G＝ふつうでも　H＝まさに
イ　A＝むなしく　E＝わずかに　G＝やたらに　H＝おそらく
ウ　A＝無理に　E＝わずかに　G＝もっぱら　H＝たぶん
エ　A＝無益に　E＝ほんの少し　G＝ふつうでも　H＝さながら
オ　A＝むなしく　E＝おそらく　G＝ひたすら　H＝まさに

(2) 文章中の［B］・［C］に共通してあてはまることばを、**漢字一字**で書け。

(3) 文章中にD一生かかってもいいから本物を見つけようとはしないのか とあるが、「本物」とはどのようなものか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　遠い国にある、めずらしいもの。
イ　万人がよいとする、流行に沿ったもの。
ウ　時代の流れに左右されないもの。
エ　手に入れるのがむずかしい昔のもの。

(4) 文章中にF驚くなかれおばさん以上に国宝的な存在となって今に至ったのであるとあるが、「国宝的な存在」とはどのような人物のことか。「伝統」という語を用いて、**二十字以上、二十五字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(5) 文章中にIレトロやグルメで鵜の目鷹の目の女性雑誌も、「佐々木」のようなかくれた存在には目が届かなかった とあるが、どのようなことを表しているか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　次々に新しいものを掲載する「女性雑誌」を取りあげることで、現代の日本の豊かさを象徴させる一方で、戦後客が少なくなった「佐々木」の貧しい生活ぶりを強調している。

イ　流行に敏感な日本人の様子を代表する「女性雑誌」と、昔ながらの暮らしをしてきた「佐々木」とを対比させることで、時代の流れの速さを印象づけている。

ウ　人々の欲しい物を探し回る「女性雑誌」の落ち着きのなさは、人の気配もないような静かな生活を愛する「佐々木」とは相容れないものであることを示している。

エ　現代日本を象徴する「女性雑誌」と、古くからの日本のあり方を代表する「佐々木」を対照的に取りあげることで、現代日本の浅はかさを指摘している。

(6) 文章中に J ささやかなところに神宿る とあるが、どのようなことを表しているか。それを説明した次の文の [a]・[b]・[c] に入ることばを、文章中からaは**二字**で、bは**一字**で、cは**七字**で抜き出して書け。

いつも [a] や [b] を欠かさないなど、[c] に気を配りながら暮らすことがすばらしいことなのである。

(7) 文章中には、次の [　] 内の段落が抜けている。この段落はどこに入るか。最も適当な位置を文章中の〈ア〉～〈エ〉のうちから一つ選び、その記号を書け。

こんなことはいくらいってみてもはじまるまい。「悪者探し」は衛生に害があるだけだ。

(8) この文章の内容として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　女性ならではの視点によって気づいたことを、おだやかな言葉づかいで伝えている。

イ　自分の愛するものについて語りながら、同時に現代の日本のあり方を批判している。

ウ　日々の生活の中で気づいたことや反省すべき点を、とりとめなく自由に書いている。

エ　男性的な文体を用いて、自分の考えている内容を理論的に読者に伝えようとしている。

古典・語句・文法

内容理解

3　次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

楊香はひとりの父をもてり。ある時父と共に山中へ行きしに、[A] あらき虎にあへり。楊香、[B] をうしなはむことをおそれて、虎を追去らむとし侍りけれども、かなはざるほどに、天の御あはれみを頼み、「こひねがはくは、わが命を虎に与へ、父を助けて給へ」と、心ざし深くして、祈りければ、[C] 天もあはれと思ひ給ひけるにや、今まで猛きかたちにて、取り食はむとせしに、虎にはかに尾をすべて逃げ退きければ、父子ともに D 虎口の難をまぬがれ、[E] 家に帰り侍るとなり。これひとへに孝行の心ざし深き故に、F かやうの奇特をあらはせるなるべし。

（「御伽草子」による）

(1) 文章中の [A]・[C]・[E] に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　A＝つつがなく　C＝さすが　E＝たちまち
イ　A＝たちまち　C＝つつがなく　E＝さすが
ウ　A＝つつがなく　C＝たちまち　E＝さすが
エ　A＝たちまち　C＝さすが　E＝つつがなく

(2) 文章中の [B] に入ることばとして最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　自分の力　イ　父の命　ウ　天の助け　エ　虎の尾

(3) 文章中に D 虎口の難 とあるが、この「難」と同じ意味のものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　盗難　イ　難点　ウ　難問　エ　難詰

(4) 文章中に F かやうの奇特 とあるが、その具体的な内容が述べられている部分を文章中から**三十七字**（句読点も字数に数える）で探し、**はじめ**と**終わり**の**三字**を抜き出して書け。

(5) この文章の内容として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　絶体絶命でも強く祈れば天も味方するという教訓を伝えている。

イ　あることわざが生じるきっかけになった不思議な話を語っている。

ウ　ある子どもの孝行心の深さがよく表れている話を紹介している。

エ　親と子どもの間の愛情の深さを学んだ虎の様子を物語っている。